ドイツ中世（12、13 世紀）の tugent と untugent
── Thomasin von Zerklære の Der Wälsche Gast に映るその諸相 ──

尾　野　照　治

ストア哲学とキリスト教倫理を基礎として、神による世界秩序を守るための思想を展開したトマズィン[1] は、1186 年に生まれ（没年は不詳）イタリアのアキレーアの司教座聖堂参事会員を務めながら、ドイツ人の最も良き力に絶大な信頼を置くことによって、中世高地ドイツ語の韻文で道徳哲学の教科書とも言える『異国の客』[2] を著した。教訓詩人とも称すべきトマズィンは、この著書でキリスト教騎士の理想を厳しく説いている。

この論考は、トマズィンの『異国の客』の「第六の書」[3] に視点を置いて、tugent（徳操）と untugent（不徳）の諸相を考察するものである。詩人はこの書で、前の「第五の書」[4] で述べられたエートスの形而上的原理を、様々な比喩表現を用いながら発展的に説明する。前の書のその原理によれば、善の最高のものは神であり、その他の善、つまり徳操はすべて、人を神へと導いていく。それに対して、悪の最も卑しいものは悪魔であり、その他の悪、つまり不徳はすべて、人を悪魔へと導いていく。最も高い善と最も卑しい悪の間に、6 種の欲求が介在する。それは、rîchtuom（富）、hêrschaft（支配）、maht（権力）、name（名望）、adel（門閥）、gelust（欲望）の 6 種である。これらは用い方によって、倫理的に善と悪のいずれかに区分される。但し、いずれも可逆的である。重要な徳操である stæte[5]（変節しない性質）が守ら

れれば、その 6 種は善になるが、節度を守らず神から与えられた秩序を勝手に、不徳である unstæte（変節し易い性質）に投げ込めば、その 6 種は悪になる。これらは徳操に基づいて正しく使われると、天国へ昇るための道具になるが、しかし不徳に染まって間違った使い方をされると、これらは悪魔の道具にされて人を地獄へ引きずり落とす。善と悪の間にそれらが介在していることとは別に、地上から天国へ昇っていくための梯子（徳操）が 6 段、地上から地獄へ落ちていく梯子（不徳）も同様に 6 段ある。前者は下から順に、armuot（貧しさ）、milte[6]（気前よさ）、lieb（愛）、senpht（優しさ）、reht[7]（正義）、wârheit（真実）と称され、6 種の徳操を構成している。後者は上から順に、übermuot（思いあがり）、girde（貪欲）、neit（妬み）、zorn（怒り）、unreht（不正）、meineit（偽証）と称され、6 種の不徳を構成している。天国に向かう梯子の各段は堅固に作られているが、地獄に向かう梯子の各段は壊れかけた状態で下に傾いており、足を滑らせやすく作られている。天国の神と 6 段の徳操は善とされ、地獄の悪魔と 6 段の不徳は悪とされる。それらの間に介在する 6 種の欲求は、6 段の徳操とかかわれば良きものとなり、逆に 6 段の不徳とかかわれば悪しきものとなる。「第五の書」ではこのように、tugent と untugent が図式的に説明されている[8]。

以下の叙述は、『異国の客』の「第六の書」を解釈し説明訳を試みたものである。これを味読する識者が、当時の知識人の思考法や世界観を、容易に興味深く追体験できるようにするためである。現在からおよそ 800 年も前の、しかも東南アジアの日本から遠く隔たったドイツ語圏の難解な作品ゆえ、たとえ原文に忠実な翻訳を試みても、全体として理解の困難な訳文になる危険性が大きい。いまだ現代ドイツ語訳すら刊行されていないところから推すに、この作品はドイツ人研究者にとっても、解釈に困難を感じる箇所が少なくないようだ。それにもかかわらず、筆者が敢えてこの作品の解釈と説明訳を試みるのは、ドイツ中世を深く理解するために、この作品を知ることが不可欠

であると確信するからである。

Ⅰ.

トマズィンは「第五の書」で、私達は徳操によって神のもとへ行くべきであること、そして不徳と罪がどのようにして私達を地獄へ導くのかということについて、詳しく説明した。神のみならず神の命令を実行しようとする人も、すべての人が徳操を愛するのだが、しかし徳操の助言に従おうとする人を、価値のない人だと見なそうとする者がいることも語った。その後「第六の書」で詩人は、前の書を承けて更に、徳操の高いすべての人に、決して徳操を断念することがないようにと注意を与える。

> wan ob daz ein wîle geschiht / daz man si niht nâch rehte hât / sô wizzet doch, swer mit rehte gât, / der sol ze jungest dringen vür / hin ze der sælikeit tür.[9)]
>
> 〈というのは、人が徳操を正しく持てないことが暫くの間起こっても、正しく進んで行く人は最後には至福の扉へ押し進んで行くはずだから。〉

ここで詩人は、いつものごとく例え話をする。あるとき町が敵によって占領されたために、町の住人達はやっとの思いでお金と衣服を持って逃げた。しかし彼らの中に、何も持たずに逃げようとする一人の男がいた。智恵と分別を持ち合わせているその男は、荷物を一杯背負って行く人々からその訳を尋ねられたとき、「私の心がお金や財宝を運んでくれるのです。」と答えた。これは皆の嘲笑の種となったが、暫くすると敵が馬で追って来て、重い荷物をかついで逃げていく町の人々を捕らえた。しかし、何も背負っていないあの男は身軽だったので、うまく逃げおおせた。智恵と徳操と分別は、どれほど

長い間隠れていようと、最後にはその姿を現して私達を救ってくれるのだ。

徳操の高い人々は暫くの間他の人々の不徳によって、苦しみ・悩み・痛み・嘲笑を受ける。しかし、神はご自分とともに進もうとする人々を助けて、多くの支配権が得られる所へと導いてくださる。その結果、至福は必ずその人々のものになる。たとえ彼らがこの世で全く幸せでなくても、最も快く暮らせる天国では幸せになれる。主の命令を実行する人は徳操高き暮らしをするので、主はその人に多くの支配権をもたせる。神は素直な心を持つ人に、この世で莫大な財貨をお与えになる。徳操の点で心変わりしないヨブが失ったものを、神は二倍にして返し彼を幸せになさった。他方エジプトでは、主君の奥方で魅惑的な肉体をもつ女性が、ヨゼフに同衾してくれるように誘った。けれども彼は決して不貞を働こうとはしなかった。彼は若いときに体得した大きな徳操をもっていたからである。その奥方を拒絶したために、それ以後大いに苦しんだが、しかし神は彼を死から救い出された。ヨゼフはかつて自分を奴隷として買い取ろうともしなかった人たちの支配者になったので、彼の長い間の苦しみは完全に償われた。ヨゼフは以前不当なことに身売りをされたが、そのことを決して恨むことはなく、彼を遠い異国へ売りさばいた心卑しい人たちに、名誉と財貨さえも与えた。ヨゼフは大きな苦しみを味わったのに、最後にはかの至福の扉へと進んで行ったのだ。

モーゼの場合も同様であった。あるとき兄弟を殺そうとした若者を見て、モーゼはその行為をやめるよう説いた。不徳に染まるその若者は、一体誰がモーゼを支配者に選んだのかと悪態をついた。しかし、モーゼを支配者と見なそうとしなかったイスラエルの民は、彼にすっかり支配されることになる。経験未熟な人や愚か者はモーゼに決して耳を貸そうとしなかったが、長老や賢者は彼に従った。聖書に書かれてあるように、これは我らの主の力によって生じたことである。徳操ある人は、大きな支配力の獲得に心を砕いたりしないものだ。それは神にお任せし、人はただ一筋に正しい行動を心がけるべ

きである。支配を望むことは、徳操が欠けていることを表わす。支配に無関心なダヴィデ[10] を、羊どもから連れ去られた神の御意志に思いを致せば明白なこと。自ら支配力を獲得しようとする人は、完全に徳操を有していると思い込んでいるものの、実は全くの不徳の持ち主である。執拗に支配を望む人は、神に選ばれるのではなく自分で自分を選んでいるだけのこと。支配できるほどの能力がないと思う人は早速それをやめるべきであり、たとえその能力があると思えても、自分よりももっと有能な適任者がいることを、神が隠しておられるだけだと洞察すべきである。それゆえに誰でも、過激に支配を求めて徳操の道から逸れていったり、神に楯突いたりするべきではない。自分勝手な判断を差し控え、神の御心に従うべきであるというのが、神の御意志であり命令なのだ。神はひとたび実行しようと思われたら、必ずそれを実現なさる。愚かさゆえに自分が大いに役立つと思い込む人が多いが、自分を賢いと思うのは愚か者の賢さである。神は立派な人や賢い人を、名誉および支配へと自ら導いていかれる。自分が役に立つ人物だという思いあがった気持ちを抱かなくなれば、それだけいっそう早く神に導いてもらえる。神はヨゼフに大きな支配力を授け、その結果ヨゼフは牢獄から解放された後に君主に選ばれた。ヨゼフが間違った考え方を避けるようになったとき、初めて神はヨゼフに利益を得させたのだ。

追放されたモーゼが帰国した後、神のお力によって完璧な君主になったという奇蹟は、確かに聖書に書かれている。人は誰でも徳操に邁進すべきであって、名誉のことは神にお任せすべきだ。モーゼだけではなくダヴィデもまた、王位に就くまでにたくさんの悲しみや苦しみに耐えた。先王サウルは、人望を集めるダヴィデを憎み、いつも彼に怒りと敵意を抱いていた。ダヴィデは先王から大きな苦しみを被ったが、その死後にめでたく王となった。辛抱強さのゆえに至福に到達したのだ。先王に復讐する機会はあったが、ダヴィデは決してそうしようとはしなかった。

got selbe der wil sich niht / zehant rechen: swem daz geschiht / daz er senfte und dultic ist, / der volget got zaller vrist.[11)]

〈神ご自身はすぐに返報しようとはなさらぬ。（モーゼ・ヨゼフ・ダヴィデのように）心優しく忍耐強くある人は、いつも神に従う。〉

Ⅱ.

自分が称賛されない愚かな人は、当然ながら立派な人を称賛することもない。立派な人をしかるべく称賛する術を心得ている人だけが、完全に徳操高くいられる。さもなければ、その人は立派な人とくだらぬ人との区別ができない。なぜなら不徳の人は、不徳に属するもの以外の何ものにも注意を払えないからだ。不徳は立派さを見分けることができず、人をすっかり愚か者にする。自分自身が獲得したことのないものを、誰も知ることはできぬ。自分の財産に注意を払えるのが、その人の最高の分別である。これまでずっとろくでもない存在となっているのは、自分自身のことが分かっていないからである。「これはすべて私の財貨だ。」と言うとき、その人は自分自身を立派な人物だと勘違いしている。その財貨によって彼はすっかり目が見えなくなり、徳操高き人なら何をなすべきかということが、全く分からなくなっている。現今見られるように、金持ちは確かに毎日貧乏人を軽蔑している。金持ちで不徳の愚か者が、徳操高き貧乏人よりも重んじられている。 後者がどれほど賢明に振る舞っても、家畜のごとき愚か者は彼を全く無価値な者だと評する。高利貸しは、一文無しの人よりも自分の方が立派であると思い違いをしている。つまり高利貸しは、自らの無知な助言に騙されているのだ。

世の人々が金欠を嘆くと、高利貸しはたいそう喜ぶ。自分が大きな分別を持っているように勘違いする：「世の人々が私に心から頼み込まなければならない程の商売ができるとは、我ながら立派な甲斐性があるものだ。それな

らもっともっと金を稼いでやろう。」愚かな高利貸しは、自分の狡猾さにすっかり騙されている。自分に大きな分別が備わっていると思い違いをしているのだが、しかし愚かさだけが高利貸しの儲けである。彼が獲得した財貨は、ひとたび貸し出されたらもはや彼のものではない。彼が私に財貨を貸してくれると、私は彼よりも気楽で快い。というのは、彼が獲得した財貨は商売道具になるので、彼はそれをすぐに使い果たすことはできないが、客である私はそれをすぐに使い果たすことができるのだから。私に貸した限り、彼はもはやそれに手をつけることはできないので、しっかりと目を見開いて見張らねばならぬ。絶えず心配しながら、私の金庫番を務めることになる。すると高利貸しは言う：「私があなたに貸すものを、あなたは必ず返さなければならぬ。」それに対して私は答える：「それをお前に返すのではない。預けるだけだ。なぜなら、お前はずっと私の金庫番なのだから。もしお前が長生きできなかったら、そのときは私自身が金庫を管理することにしよう。」するとまた高利貸しは言う：「私が長生きできないときは、あなたがそうしたくなくても私の子供達に借金を返さなければならぬ。」しかし、子供達が高利貸しの言うことに従うのなら、私はそれをその子供達にまた預けることになる。子供達が高利貸しになるなら、彼らもまた私の金庫番になるのだから。するとまた高利貸しは言う：「私の子供達は金庫番にならずに、貸金を取り立てるやもしれぬ。」しかし意地汚い高利貸しにとって、そんなことが一体何の役に立とうか。高利貸しを生業にしてこの世の幸福を追求する彼は、地獄の底に落ちるが必定。神の怒りをかうようなことをしない方が、千倍も好ましいことなのに。わが子のためにたくさん稼げないことを憐れむよりは、親が自分の邪な利益によって子供の魂を台無しにしたことを、分別をもって憐れむべきである。父親が神の怒りを受けないようにするために、息子は父親が不当に手に入れたものを返して償いをするがよい。父親が不当に手に入れたものを子供が手放さないなら、その子供もまた身を滅ぼす。人は自分の

子供のために、生前も死後も苦しむことになる。従ってある賢者が言った通り、子供をもったことのない人は不幸中の幸いである。

Ⅲ.

高利貸しは、この世のみならずあの世においても苦しみを受ける。

wir haben wunderlîche site, / daz wir sô harte minnen / dâ mit wir hie und dort gewinnen / nôt und sorgen, kumber, leit:[12)]

〈私達は不思議な習慣を持っている。この世でもあの世でも不徳によって、苦しみ・心配・悲しみ・悩みを得るのを激しく好むという習慣を。〉

高利貸しのような忙しさは、私達に多くの苦しみをもたらす。それとは反対に、徳操をもつと安らかな生が得られる。徳操は私達が死んだ後に、もっと幸せに暮らすことを可能にしてくれる。それに対して不徳に身を委ねる人は、ひじょうに大きな苦しみを被る。徳操に身を委ねる人は、老年でも若年でも安らかで清らかな生をおくる。謙虚さを備えている人は、多くの苦しみを被ることがない。なぜなら、他の人から言われたりされたりすることに、謙虚に耐えることができるから。この世で穏やかな生をおくれる人は、死後にもっと素晴らしい生を与えられる。思い上がった心をもつ人は、苦しい死出の旅をする。他の人から被害を受けていなくても、思い上がって心の中で考える：「あいつをこんな風に脅してやろう。あいつが生前にした返済の約束を、遺族が履行しなければならぬように。こんなことを諦めるなんてできぬ相談だ。」さらにまた次のように考える：「それだから時々、あの殿御に言っておいたのだ。俺って奴はどこまでもしつこく取り立てるし、それができる男なんだ。」彼が心に抱いている思い上がりは、これでもまだ満足しない。

思い上がった心の助言による振る舞いは、彼には好ましいことだと思えるし、借金した当人の死後のことも述べておいたので、自分がまことに立派な人物に思える。驚くべきことに、愚かさからはこれほどに浅ましい考えが生ずる。現世におけるこのような思い上がりゆえの苦しみによって、彼は死後にもっと大きな苦しみを味わうことになる。

妬みを抱いていない人にとって、他の人の役に立てるのはいつも快いことだ。というのは、このことによって彼にも喜びが与えられるから。彼はこの喜びによって、あの世で永遠に今よりもずっと楽しい暮らしができる。しかし、妬みを抱く人はいつも苦しむ。どんな財貨が得られようと、むしろそれによって大きな苦しみを被る。この世でどれほど財貨を獲得しようと、その人がそれぞれの財貨によって苦しい思いをするのを、私は皆に知って欲しいと思う。彼がその苦しみによって得られるものは、神の怒りを買うことによってこの世でもあの世でもすべてを失うことだけである。そうなれば、彼は生まれてこない方が良かったであろう。心に怒りを抱いていない人は、あの世でもっと大きな安らぎを与えてくれる安穏を選び取ったのだ。しかし、怒りを抱いている人はいつもせかせかと多忙である。他人から何もされていなくても、害を被ったように思って常に怒りを捨てないでいる。いつも正気を失っていて、自分の不徳を広く世間に暴露している。彼の顔色・声音・物腰は、不徳が彼のもとに根付いていることを、どこにおいても晒している。その不徳は絶えず彼に邪な話を囁き、地獄の底にある椅子に彼を座らせる。

清らかな生活をおくろうとする人に、私達の主は安らかな生活と財貨をお授けになった。それに対して淫らな人々は、老年でも若年でも苦しみを与えられている。淫らさは卑しい不徳であって、絶えず敵意を抱き、喧嘩を避けず、争いごとを好む。淫らな人が年を取ると苦しみが絶えない。女性達に素晴らしいと思えることを実践できる若者は幸せだと、彼は日がな一日妬んで過ごす。女主人には自分よりも若者の方がはるかに気に入られていると思い

込んで、彼はいたく苦しむ。淫らさと共に自身を老齢へと導いた愚かな女性、そして若い女性の方がもっと気に入られることを妬む愚かな女性は、前述の男と同様である。このように淫らな人々は、死を迎えるまで不徳に苦しめられる。誰に対しても不当なことを行わないようにする人は、しばしば多くの楽しみを味わえる。そして安らかな生活をすることによって、より良い生活を神から永遠に授かる。それに対して不当なことを好んで行う人は、しばしばそれによって苦しみを味わい、永遠に神から敵意を受ける。

怠惰に身を任せる人は多くの苦しみを味わい、自分がこの世で行うすべてのことによって苦しむ。それに対して怠惰でない人は、有能な人がそうするように、すべてのことをいつも軽々と見事にやってのける。怠惰に過ぎる人は、いつも暇を玩んでいる。暇にまかせて寝そべった生活を送っている人は、いつも役立たずである。役立たずは、全くの余計物。このような人は、地獄の業火に投げ込まれて焼かれる以外に能がない。悪魔はその火で暖を取っている。怠惰な役立たずが何の役にも立っていないのだから、悪行をなす人については推して知るべし。略奪や盗みに身を任そうとする人は、多くの苦しみ・心配・恐れ・悩みを被る。このような苦悩とともに、死後にはもっと酷い苦悩を受ける。しかし、略奪や盗みをしない人は、心配・恐れ・悲しさによって苦しむことが少ない。嘘に身を任そうとする人は、あれこれと考えてひじょうに多くの苦しみを被る。なぜなら彼が話すことは、嘘を見抜かれないようにしっかりと飾られなければならないからだ。その人は当然ながら大いに苦しむのであるが、それでいて神の怒りもかうのだ。

しかし、すすんで真実を言う人は、苦労せずに話せる。真実を言おうとするとき、そのための言葉が自然にすっかり整えられるから。それに対して嘘話をでっち上げようとする人は、巧みに嘘をつこうと粉骨砕身の用心をしなければならない。さもなければ彼は、すぐにばれる嘘をつくことになる。後々までずっと巧みに言い逃れをしようとするなら、たくさんの嘘を探し求

める必要がある。嘘の種を見出そうとする人は、いつまでも探し続けざるを得ない。私達が苦も無く真実を見出せるように、神はそれを用意してくださった。真実のために神の使者となった者は、裁判官をどのように言いくるめるかということに決して意を用いるべきではないと、神から命令を下された。真実を話す証言者は心が常に整えられ、何を話すべきかをよく心得ている。それゆえ神に助けられて見事に話せる。それに対して嘘を語る証言者は、狡猾に心を整えていなければならない。さもなければ、黙っておくべきことをうっかり喋ってしまう。以上述べたことが分かれば、徳操ある人はいつも安らかに暮らせるということが、十分に理解できるはずだ。しかし、不徳に支配されている人の苦しみは、全く救いようがない。

> dâ von sol von der tugent / weder an alter noch an jugent / nimmer komen der dâ wil / vreude und sælde haben vil.[13)]
>
> 〈それゆえ喜びや幸せをたくさん持とうとする人は、老年でも若年でも決して徳操を失うべきではない。〉

Ⅳ.

物惜しみせずに正しく与えることのできる人からは、決して奪い取ることはできない。物惜しみしない人は、いつも自由意志で与えるからだ。それに対して吝嗇の人からは、いつも奪い取ることになる。彼は決して人に与えようとしないので、彼からは奪い取る以外に方法がない。富を蓄えているのに吝嗇の生活をしている人は、どうして他の人に与えることができよう。カッコウは小心ゆえに、一枚の餌の葉をまるごと食べようとはしない。餌の葉がなくなるのを怖れるからだ。樹の枝にとまっているときも、葉をすべて食い尽くさないように、極めてゆっくりと食べる。食べ物がすっかりなくなるの

を心配しているのだ。これは物惜しみをする人のやり方である。吝嗇の人の財貨とカッコウの葉は、どちらもまるで埃のように消え失せる。浅ましい輩は、いつか財貨をもっと必要とする時がくるだろうと考えて、自分の財貨に手をつけない。実はこれは考え違いであって、財貨など要らぬという考え方をするのでなければ、彼の身に苦しみが起こる。それを避けるために、彼は悪知恵を駆使して生きていく。浅ましい輩は、カッコウのやり方に倣えと教えられるからだ。それぞれは財貨によっても葉によっても、決して幸福にはなれない。冬がカッコウから葉を奪い去るように、浅ましい人の財貨も結局のところ、巧妙に利益をあげる人が持ち去る。カッコウの教えを認めないなら、正当な贈り物をためらうことなく受け取るべし。しかし、カッコウの教えに従おうとする人は、正当な贈り物の受け取りをためらう。つまり浅ましさは、決断力がないことから生ずる。無くなるのではないかと怖れると、心の底から意地汚さが浮かび上がってくる。不徳を持ったまま戦って財貨を得ようとする者は、いとも簡単に打ち負かされる。そのとき自分のさもしい心のために、財貨も自分自身をも共に失う。その戦いでためらいが助長するものを、意地汚さが同じように助長する。戦い取るだけの価値を財貨に認めない人は、その戦いで剣を見事にふるうことができる。戦いにおいて財貨など顧みない人が、逆に財貨を得られることはしばしばある。その人が敵の群れを蹴散らすと、財貨が彼のもとにすっかり留まるからだ。あまりにせっかちに財貨を求めると、かえってそれを失うことになる。

あの世で幸せになろうとすれば、この世で不徳・浅ましさ・意地汚さ・吝嗇と戦わねばならぬ。今の私達は、ややもすれば戦う前から財貨を求めがちだ。だから私達は、しばしば打ち負かされるのだ。私達が何か不正を行おうとすると、悪魔は楯持たぬ私達をなぎ倒して見方に引き込む。そうされないように私達は、数多くの良き考えを振り向けて不正を止めるべきである。そうすれば敵は私達のもとから立ち去って、地獄の炎の中へと滅びて行かざる

を得ない。立派な騎士も徳操の旗を打ち立てて、敵である不徳の群れの中へと巧みに突進し、その群れを徹底的に打ち破るべきだ。立派で高貴な騎士達は、十分に留意するがよい。思いあがりは自分の群れを引き連れて、どのような行動にうって出るか。完全に打ち負かすべき思いあがりの群れの中に、誹謗・暴力・不作法がいる。それらの旗振り役を務めるのは怒りだ。指揮をとるのは意地汚さ。名望や贅沢もそれらの援軍となる。立派で高貴な騎士達は辺りを見回して、貪欲が何をするか留意するがよい。それは家来達を動かして軍勢を固める。貪欲と一緒にいるのは、高利貸し・強奪・泥棒・詐欺・偽証・嘘・妬み・軽率である。武装した不貞もいる。その群れの中へと、浅ましさ・大食らい・酩酊が走り込んでいく。不幸な幸せ・辛辣な挨拶・愚かさを伴う貧しい裕福・豊かな貧乏・うわべだけの愛なども、その群れの中にいる。不誠実もその中へと走り込み、長い苦しみが短い喜びの後に続く。

怠惰もその群れをすっかり武装させ、戦いの準備をさせた。眠り・伸び・欠伸が、いつもその群れの中にいる。勝利を失いたくない人や永遠の死を選びたくない人は、不徳によって引きずり降ろされないように、しっかりとそれに抵抗しなければならぬ。騎士と称される人、あるいは真に騎士である人は、今しかと自分の身を悪徳から守るべきだ。立派な人はだれもが、老年でも若年でも不徳に対して武装すべきである。神のもとへ行きたいのなら、たとえこの世でどれほど永く不徳と戦うことになったとしても、勝利できたらその戦いを余りに苛酷だと評してはならぬ。多くの喜びを獲得し、大きな悩みや苦しみを避けようとする人は、老年でも若年でも、不徳との戦いを酷い苦労だと思うべきではない。

wan nie dehein kempfe gewan / sô grôze êre sô der man / der die untugent überkomen / mac, daz hân ich wol vernomen.[14)]

〈というのは、不徳を打ち負かすほど大きな名誉を獲得した戦いは、こ

れまで一度もなかったからだ。そのことを私はしかと聞いた。〉

不徳に支配され、不徳の命令下に置かれている人が、たとえ町や国を支配できても、それが何の役に立つであろうか。それに対して不徳に勝利する人は、騎士としての戦いを制する。戦いで槍を折ることだけが、騎士らしき振る舞いというわけではない。不徳の群れを大地に散りぢりにさせ、二度と芽をださせないようにすることが、本来の騎士としての振る舞いだ。

不徳の大きな群れは、四つの群れに区分できる。この四つの不徳の群れと戦う人は、確かに神の助けを必要とする。不徳の群れがあちこちにはびこっているので、高貴なる騎士は大いに気をつけねばならぬ。第一の群れである「思いあがり」（Hôchvart）が、群れの先頭に立って馬を飛ばして来る。第二の群れである「節度を守れぬ心」（Unkiusche）は、燃え盛る槍をになっている。第三の群れである「物惜しみ」（Erge）は、恥辱で武装している。第四の群れである「怠惰」（Trâkeit）は、頭から足先まで卑しさで飾られている。この四つの不徳に、すべての軍勢が従う。高貴な騎士はその軍勢の轟きに驚くことなく、一心不乱に徳操を目指さねばならぬ。徳操は不徳の群れに対して、高貴な騎士の武装をになってくれる。徳操の軍勢を率いて敢然と戦えるように、「分別」（Sin）が戦旗を騎士に授けるべきだ。「正義」（Reht）から剣を受け取り、曲がりくねったものを真っ直ぐにする。「思慮深さ」（Bescheidenheit）からは楯をもらい、「堅忍不抜」（Sicherheit）からは鎧をもらう。なぜなら思慮深き人は、常に微動だにしない人であるからだ。「信心」（Geloube）は、正しく信仰する人の頭の上に兜を置く。人の行いは、信仰がなければ無に等しい。それは頭の無い体が無に等しいのと同様である。高貴な騎士は不徳の群れの中へ見事に馬を進められるように、「希望」（Gedinge）から馬を受け取るべきである。そうすれば不徳の群れは騎士から離れていく。臆病な気持ちによって馬を引き戻すことがないよう、「勇敢

さ」（Vrümkeit）に拍車をかけてもらうべし。決して戦いから逃げることなく、「節度を守る心」（Kiusche）から手綱を受け取り、それを操って生活を正しい方向に向ける。すべきでないことを厳に慎み、「変節なき誠実な心」（Stætekeit）から鞍を受け取るべし。どのような喜びや悲しみによっても、あちらへこちらへと動揺させられることのないように。「控えめな心」（Diumuot）の槍を携えながらも、自分の勇姿を見てもらうために、突撃する最初の騎士の群れに参加するべきだ。

「思いあがり」（Übermüete）を槍で突き落とせば、不徳の群れを蹴散らすことができる。「勇敢さ」の拍車を掛け、「希望」の馬に命じて堀の上を飛び越えさせ、山・岩・沼地にも慣れさせよ。不徳の大きな群れを、前でも後ろでも突き放すために、馬の向きを機敏に変えよ。「節度を守る心」の手綱を引いて馬の向きを整え、多くの不徳を打ち倒すがよい。足の下に踏みつけるべきものは、「節度を守れぬ心」「怠惰」「吝嗇」「妬み」（Nît）「怒り」（Zorn）そして「愚かさ」（Nerrischeit）である。「正義」から受け取った剣を忘れることなく、それを振って道を平らに広くせよ。立派な人は、戦いにおいて果てしなく斬りまくり、永遠に生きるために絶えず戦わねばならぬ。

不徳に打ち勝つ人は、慢心を抱くことのないように留意すべきだ。力尽くで不徳を打ち負かして慢心を抱く人は、思いあがりの心に舞い戻り、再び不徳に支配されることになる。それに対して、不徳の大きな群れを打ち負かしても慢心を抱かぬ人は、不徳の群れを完全に打ちのめす。人は言う：「私達の敵と欲求は、いつも私達を悪しきものへ、そして罪へと引っ張っていくのです。たとえば肉欲は、自己の肉体にもっと心地よいものを欲することで罪へと導きます。また世の人々の嘲笑も私達を悪しきものへ、そして罪へと引きずっていきます。神に奉仕しようとすると不徳から嘲笑を受けるのが常なので、不徳の群れと戦うのは実に辛いことです。この三つのもの、すなわち敵・欲求・嘲笑は、私達をすっかり迷わせるのです。」それに対するトマ

ズィンの答えは次のようである。私達の生活はその三つのものに対して、人が本来持つべき分別によって見事に武装されている。私達の戦いをいつも苦しいものにするその三つのものに対して、対抗馬となる五つのものが思慮深さによって私達に用意されねばならぬ。信仰すべきものを確実にそうできるように、分別は悪魔に対抗して私達に、早速正しい信仰を用意すべきである。正しい信仰をもつ人が神を畏れ愛するようにという助言を、まさに信仰こそがその人に与えるのだ。それゆえ彼が神を畏れかつ愛するなら、悪魔の使者を恐れない分別を確かに持つことができる。神を畏れかつ愛する人に対して、悪魔の力は全く何もすることができない。欲求に対しても私達に、怖れる心が思慮分別によって用意されねばならぬ。それは地獄の醜悪な洞穴に対して、人が抱くべき怖れである。神を愛したり畏れたりの目覚めを考えるなら、その畏れが私達の欲求を辛いものにしてくれる。だからこそ希望を抱く人も、思慮分別によって天国へと導かれるべきだ。天国の甘美は、欲望の甘美を追いたてなければならぬ。天国の甘美を考える人にとって、欲望の甘美は全く無意味なものである。

> wider der werlde spot sol / man des tiuvels spot vürhten wol, / den man ze helle haben muoz, / swer dâ enphæht des tiuvels gruoz.[15)]
>
> 〈悪魔の挨拶を受ける人は、地獄で受けるべき悪魔の嘲笑を、世の人々の嘲笑よりも恐れるべきだ。〉

かつて天国への称賛を得た人を、世の人々の嘲笑は妨害できなかった。分別をもってそのことを洞察できる人を、この三つのもの（敵・欲求・嘲笑）は妨害できない。

V.

詩人がこれまで書いてきたように、私達の先祖がずっと神と一緒にいたとするなら、私達には戦いなど必要ない。私達は死ぬことがなく生き続けるであろう。神の国へ行く人や神の国にとどまっている人は、今後ずっと罪から確実に守られる。なぜなら神の国では戦う必要がないからだ。旧約聖書に嘘はない。悪魔の妬みによりアダムは騙された。そもそもアダムは、現在の私達が持っているような大きな不徳とは戦わなかった。節度を守れぬ心を抑制できたから。諸々の不徳のうち怠惰は彼に対して全く何もできず、欲望はむしろ彼を心安んじて過ごさせた。世の人々の嘲笑も、彼を妨げることはなかった。悪魔がアダムを激しく欺かなかったなら、アダムは不徳を十分に打ち負かしていたであろう。しかし欺かれたアダムは戦いを挑まなかったために、不徳によって打ち負かされた。それゆえ彼の末裔である私達は、いつも不徳と激しく戦わねばならないのだ。私達が神の恩寵を求めるので、神はその恩寵を授けるためにアダムの罪を私達に受け継がせた。父が犯した罪は、子に損害を与える。

敵は不徳のゆえに、神によって追い出された。そのときアダムも、不徳のゆえに追い出された。人が苦しまずに天国へ昇ろうとするのを、神は決して望まれぬ。私達が神の恩寵から逸れる振る舞いをするのは、自分の咎による。なぜなら、老年でも若年でも不徳と戦うことは苦しいからだ。自分自身を敵に任せた人は、どうして自由に暮らせよう。なぜなら、いつも不徳である敵は奴隷身分なのだから。犯した悪行と神による裁きにより、敵が天の国から追放されたからといって、私達が善行と神のお慈悲により天上へ召されることは、決して不当なことではない。私達の善意は、いつも敵の邪心と対立している。神の善意によって私達に与えられるお慈悲は、神の裁きと対極にある。いつも犯す罪のために本来与えられるべき苦しみが、私達に起こらない

ことがあるということによって、神のお慈悲が注がれていることが分かる。もしそのような状況のもとで神のお慈悲と私達の良き心ばえが見せられないのであれば、敵は「私だけが不当に扱われている」と不満をもらすであろう。しかし、心の邪な敵がそのように言うのは正しくない。敵は神の裁きと自分の悪行のゆえに、追放されて天上から降りてきたのだから。これに対して善行の人は、神のお慈悲のお蔭で天上へ昇ることができる。それは、人が善き心を持つようにとの神のご意志である。もし神の裁きが行われないとするなら、敵が悪行によって地獄へ堕ちることはないであろう。敵が神の裁きと自分の悪行ゆえに地獄へ行かなければならなかったことは、紛れもない真実である。他方、人が神の国へ昇ることは、神のお慈悲なしには起こり得ないことも真実である。神の国はあまりに広大無辺で、私達の善行がかすんで見えるほどである。分別のある人には、そのことが十分に認識されているはずだ。私達が現今目にしている通り、天上にいたものは神の裁きと自分の思いあがりのゆえに、地獄へ堕ちていった。それに対して地上にいるものは、良き心ばえと神のお慈悲によって天の国へ戻るべきだ。悪魔は神から授かるものを悪に染めて地獄に堕ちた。神から授かるものをいつまでも良いものにすれば、あの世で神からもっとたくさんのものを授かるのに。

神のお慈悲にあずかれない人は、心が邪なのだ。もし敵がお慈悲にあずかっていれば、彼でさえもいまだに天の国に留まっているであろう。人は正しい善行ゆえに神のもとへ行くはずなので、そして不徳と戦って苦しむのでなければ誰も善行を積めないので、私達はだれでも老年でも若年でも不徳と戦うことを避けてはならぬ。

最初の人アダムは、不徳に対してしかるべく自分を守ろうとしていたら、永遠に苦しみ無しに生きられたであろう。彼にはその力が備わっていたが、その逆に罪を犯す力も付与されていた。それに対して神は私達に、天上へ昇りたいなら苦しまねばならぬ、そして罪を犯すことは許されぬと命令された。

私達が地上で不徳と戦えば、天上でその報酬が与えられる。そうすればアダムのように天の国から堕ちることはない。それゆえ私達は、不徳と戦わなかったアダムよりも大きな戦いを経験しなければならぬ。不徳は悪魔の助言を得て、最初の人を天上から連れ出したので、もし人が天上へ昇りたいのなら、敵および不徳の両者と激しく戦うべきだ。敵は神に対して妬みを抱いているので、自分が追放された天の国からアダムを引きずり降ろしたように、私達を地獄へ引きずり降ろそうとしている。私達は小さな苦しみを受けると、それより大きな苦しみで報いようとする。それなのに、極悪の敵によって地獄へ引きずり降ろされる危機から、自分自身を守ることを怠っている。地獄では無限の苦しみが待っており、償いが一切できないまま苦しみ、生きながら死んでいかねばならないのに。悪魔に打ち勝とうとする人は、すべての人々としかるべく正しい生き方をするべきだ。他の人々に敵意を燃やして、自分の持てる力を弱めるべきではない。

> swer im einem hât an gesît, / der hât verendet allen strît. / ich rât eim ieglîchn rîter wert, / die wîl des tiuvels strît wert, / daz er niht anders tuon sol[16)]
>
> 〈悪魔ひとりに打ち勝てさえすれば、すべての戦いを終えられる。悪魔との戦いが続いている間、立派な騎士は他のことを何もすべきではないと、私は助言しておこう。〉

一意専心を旨とすれば、騎士は十分に戦うことができる。たとえば、熊と戦わなければならない人が、その最中に小銭を数えるなんて考えられないことだ。真剣に戦わなければならないとき、財貨が私達を惑わすことは多い。戦いの最中にそのようにして私達を惑わすことができれば、敵は心の底から喜びを覚える。哀れな人を打ち殺す者は、騎士の正義を求めて戦っているとは

言えない。哀れな人から財産を奪う者は、騎士にあるまじき心を抱いている。騎士たる者は、常に騎士としての義務を思うべし。どうして騎士になったのか。眠りを貪るためなのか、あるいは美味しい食事やワインのためなのか。そうであれば全くの考え違いで、家畜でさえも食べることを喜ぶ。それでは、美しい衣装や武具のためなのか。そんな物は百姓にくれてやれ。足に鈴を付けられると、それを付けたまま歩かねばならぬと思うのは宮廷道化だ。

騎士の務めを果たそうとする人は、たらふく食べることよりも騎士らしき振る舞いにこそ、多くの労力を注がねばならぬ。美しい衣装を着たり派手に手を振りながら歩くよりも、もっとたくさんのなすべき事がある。なまやさしい暮らしばかりを望む人は、騎士の務めを果たすことはできぬ。逆に無為をかこつ人は、実のところいつもあくせくしている。心の思いから捨て去った方がよい事を、いつまでもくよくよと考えがちなのだ。人は決して暇をもてあましてはならぬ。暇な人がつまらぬことで頭を悩ますなら、暇が多忙をもたらす。騎士が当然なすべき義務を確実に行おうとするなら、日夜全力を尽くして教会や貧しい人々のために働くべきだ。しかし、そのように働いている騎士の数は、今日では極めて少ない。騎士の義務を果たさない人は、百姓になる方がよい。そうすれば、神もそのつもりで考えてくださる。救いの手を差し伸べようとしない卑しい騎士道を身につけている人は、義務に違反しているので非難されて当然である。他の人に不正を働く者は、かえって自分がそれ以上に苦しむことになる。積極的に不正に関わる騎士は、救いの手を差し伸べない騎士よりも、はるかに大きな苦しみを被るのだ。

宗教者についても同様で、自分の務めを正義に則って恥ずかしくないほどに果たそうとするなら、ひじょうに多くの困難を克服しなければならぬ。歌ったり大声で叫んだりするよりも、もっとたくさんなすべき義務がある。宗教者は清らかな身体、慎み深い生活、立派な行い、素晴らしい訓話によって、見事な手本を示し徳操の最高位に立つべきなのだ。騎士は心優しい妻と

信頼のおける領民とともに、騎士らしく暮らすのが似つかわしい。主君と一緒に暮らせるのを騎士が望むように、それと同じ思いで家来と一緒に騎士らしく暮らせるよう心掛けよ。主君を上に戴いている人は、主君に命じられることをすすんで行うべし。そうすればかえって、自分の隷属状態を軽くすることになる。騎士がいつもそのように実行するなら、その優れた心は苦しみを減らす力を彼に与えてくれる。果たすべき騎士の義務を、一日中喜びながら行う人は、立派な分別を持っていると言ってよい。喜んで行なえば行なうほど、嫌な思いをすることがいっそう少なくなる。義務をすすんで果たす人は自由人であり、それに対して嫌々それを果たす人は奴隷である。その場合、心も体も隷属状態にあるのだ。

主君から恥ずかしめを受けても、それほど大きな不名誉ではない。それよりはむしろ、自由人をまるで家畜のように隷属させようと夢中になることが不名誉なのだ。そのように振る舞う人は、決して神の意にそわぬ。人としての正義に則って、家来を自由に生活させるべきだ。家来にも神を敬うことを求め、天国に導かれている人々に思いを馳せるような奉仕を求めるのが正しい。神の国で自分よりも高い位を占めるべき人を踏みつけるなら、その振る舞いは決して騎士的とは言えぬ。真実として知っておくべきは、誰もが神の前では平等なので、完全に隷属している人はひとりもいないということである。隷属がありうると誤解している人は、少なくとも最良の人々だけは隷属から除外されていることを、まだ聞いたことがないのだ。魂と心の思いを、これまで誰も無理強いできたためしはない。それゆえ人は、主君が望む以上に命令をしてはならぬ。家来に命令する権利を持っている人に対しては、その同じ権利を彼の主君も持っているからだ。自分は主君を上に戴いていない、自分こそが主君なのだと主張するなら、それは無知な思いである。このように無知な人は、後に下位身分の人に従うことができなければ、天国へ昇ることは不可能である。主君がいなければ上も下もないのだが、幸いなことに私

達は共通の主君を戴いている。そのお方は私達の主、すなわち神である。神の命令をこそ、私達はしかと畏れるべきだ。私達は神から、魂・肉体・家臣・家屋敷・財貨・子供・妻を与えられている。名誉をもって振る舞うようにということだけが、私達に対する神の命令である。それなのに私達は家来に、神がなさる以上の命令を下す：「あいつとこいつをやっつけろ！」神は名誉ある振る舞いをさせようと、徳操・宮廷作法・善行を指示なさる。それに対して、私達は家来に命令する：「お前は好きにやれ。どのようにやろうと私がお前を支えてやる。」権力を誇る騎士は悪しき欲望を持つ者らを、策を弄して自分の家来にする。するとその家来達は、主君の威を借りてしたい放題のことをする。

> dâ von unser herre muot / der sünden von dem herren mêre: / ez muoz si bêde müen sêre.[17)]
>
> 〈それゆえ私達の主（神）はその主君に、家来が犯した罪も加えて自分の罪状を述べよと要求する。その要求は、主君と家来を痛く苦しめることになる。〉

家来達がキリスト教とは無関係に暮らし、宗教者のことを全く気にかけないにもかかわらず、家来達はよく保護されている実状がある。家来の行なうことがどんなに邪悪であろうと、主君はそれを全く苦にしない。主君の罪ある行為とその意志を家来がいつも支持してくれるように、主君は苦労を顧みず努力をしている。家来が不当な振る舞いをしないように主君が望んだりすれば、その主君は家来にとって価値のない存在になる。しかし、家来に正しく振る舞うよう強制しない主君は、最後の日に自分が神の前に立って、尋問されることにすべて正直に、従って心苦しい証言をしなければならぬ。ヘーリヤ（Hely）は聖書に書かれているように、ひじょうに善良な人であった

が、いつも自分の子供達が罪を犯すのを止めなかったためにその責任をとって、子供達の罪を自ら苦しんで償うことになったのだ。

善良な人は誰でも、家来が正しいことを行なってくれるよう努力すべきだ。しかし、そのような努力をしない人は、神に対してたくさんの責任を負わねばならない。いつも家来達を罪へといざなう人は、罪を恥じなくなるもの。すると本来主君が恥ずかしく思うべきことを、家来は平気で行う。私達はそれを正しいことだと思うようになる。このように家来を悪事に走らせて、強盗・泥棒・高利貸しにする。私達は財貨なら分かち合おうとするが、しかし心があまりに愚かゆえ、罪の汚れと恥辱を分かち合おうとはしない。私達にそのようなことができるはずはない。なぜなら、私達のために家来が行うことといえば、邪なこと、正義に反すること、そして神のお慈悲に逆らうことであり、その点で私達もそれらの咎に関与しているからである。私達はそれらの罪をすべて負っている。たとえば、狩猟の技術が長けていると猟師に賛辞を与える場合、猟犬のことはたいてい口にしない。「その男が兎を捕まえたのだ」と言っても、実際に兎を捕まえたのは猟犬である。この例え話で分かるように、家来の罪はすべて私達に帰せられる。なぜなら私達も常に、猟師が猟犬に行うように家来に命令を発するからだ。しかしその罪はまた、私達の言いなりに悪事を犯した家来にも、すっかり帰せられる。もし私が家来に人を打ち殺すよう命令するなら、私達は二人ともその罪をすべて負う。するとあなたは多分言うであろう：「私は主君の命令に従わないわけにはいきません。」これに対して私は言っておこう：「あなたは主君よりも神の方をもっと畏れるべきだ。神はあなたの主君の主人でおられる。だからあなたは神の方をもっともっと畏れるべきなのだ。」あなたが命令に従わなければ、主君はきっとあなたを酷い目にあわせるであろう。それでも、主君より神を畏れるべきだ。このような主君はあなたの魂と肉体を、恐怖の尽きぬ地獄へと送り込むのだから。

swer wil gebieten wider got, / ir sult wizzen daz sîn gebot / verliust niht den gebieter eine: / die leister sint verlorn gemeine.[18)]

〈神の意に逆らってしようとする人の命令は、その命令者ひとりだけを破滅させるのではなく、その命令を実行する人たちをも同じように堕落させる。〉

神と名誉に逆らってまで、他の人のために何かをしてあげようとするべきではない。この原則を友情においても守らねばならぬ。もし甲が乙に、神に逆らう丙の命令を拒絶するようにと言うなら、乙は甲の友情に報いようとする分別を持つべきだ。しかし私達は実際には、それとは異なった振る舞いをする。友から頼まれもしないのに、しゃしゃり出て言う：「あなたはある人の財貨を残らず奪えますぞ。あなたには騎士の風情があるから。」私達はそのように言って、友らを邪悪なことに引きずり込む。しかし私達は本来、友らが正しく振る舞おうとしなければ、友情のために無理強いしてでも正しいことへと導くべきなのだ。それなのに私達は誘惑する：「自慢の容姿をもつ婦人がいるのだが、あなたはその婦人をなんとかしてもらいたいか。彼女は恋の相手にうってつけですぞ。」そのとき彼は答える：「私はそのようなものを望まぬ。」すると私達は失望して言う：「失せろ、ならず者め！　お前は名誉にふさわしくない。こんないい話を、お前の心が望まないとは。」このような邪な助言に従おうとする人にこそ、災いが起こればよいのだが。邪な助言者は、彼に従う人と同様決して幸せにはなれない。これはしかと信ずべき真実である。

Ⅵ.

殿方はしばしば、自分達の名誉と魂の泥棒を好む。邪な助言をする者は、主君の魂をしばしば惑わせ、つまらないことで主君の名誉をすっかり奪い去る。助言者が神に逆らう助言をしていることに主君が気づくなら、その助言者は悪魔の使者であるということを認識するがよい。そのような使者を主君の所に送ったのは、確かに悪魔なのだ。立派な主君でも悪しき家来を、その主人（悪魔）の巧妙さに欺かれて受け入れがちだ。しかし、立派な主君なら家来にきっぱりと命令するがよい：「私のもとからお前の主人の国へとっとと失せろ！お前の助言に従うつもりはない。この世にのさばる真のならず者め！」自由な心を邪悪なことに向けよとか、人々からどのようにして財貨を奪い取れるかといった助言を主君に与える者は、主君の名誉となる助言をしているのではない。主君は、貪欲しか意図していない助言に従うほどに、自分を卑しめてはならぬ。主君は正しく得られるところで得るのがよい。私達も自分の家来から不当に奪うものは、自分に似つかわしくない。

人は富の方へ心を向けてはならぬ。なぜなら富というものは、悪魔の砥石・網・狩猟用の鷹であるからだ。地獄に堕ちないように天国の方へ向かう数多くの鳥を、悪魔はその網を用いて捕まえる。財貨よ、お前は悪知恵を用いて私達を研ぐ。いつもお前の流儀で悪知恵を用いて、私達がさながら剣のように鋭く切れるように。お前は私達に、たくさんの邪悪な心を植えつける。ナイフを研げば、その刃がなまってしまうまでは切れ味が鋭くなるので。儲けに没頭する人は、財貨を求める欲望で分別を懸命に研ぐから、心の刃はどんどんと磨り減っていく。そうなると彼は、名誉のことも神のことも考えられなくなり、嘲笑の種になる。自分の分別を研いでは、それをすっかり磨り減らす。自分に財産があるにもかかわらずそれを使わない人は、空腹と寒さで死ぬことがないよう心に強制を加えることができない人だ。この世で苦し

み、あの世でもっと苦しむほどに自分の分別を惑わせるとは、彼は賢いガチョウ（一見賢く見えるが、実は愚か者）に違いない。なぜなら、自分の分別を利益に任せる人は、この世でもあの世でも苦しまねばならぬ生ける屍であるからだ。しかし彼は自分自身を、賢い収税吏・高利貸しだと思い込んでいる。若者よ、あなたは浅ましい分別を儲けに向けるつもりだな。あなたの知恵は一体どこへ行ったのだ。あなたの分別の刃は、もうすっかりボロボロになったと見える。なぜなら、あなたの儲けは損失と呼べるものになっているからだ。私達にはその様子が日がな一日よく見える。あなたが利益を誇るなら、損失をも見分けられる分別を持たねばならぬ。そうすれば、卑しい名誉欲を捨て去ることができよう。というのは、気前よさを失って吝嗇を選び取り、そして徳操を不徳と交換したにもかかわらず、儲けすら求めようとしているからだ。哀れな収税吏よ、あなたは愚かな両替商だ。儲けることが大好きなのに、金を銅と交換している。あなたが人から財貨を奪うと、心の中で徳操が驚愕し逃げていく。それゆえ、あなたは酷い儲け（大損）を得る。

すぐに富裕になりたければ、富裕と貧乏を等しいものと見なすがよい。そうすれば心の中が富裕になる。貧しい人は静かにして居ながら、主君が戦いで獲得する以上に、そして主君が全力を注ぐ以上にたくさんのものを手放す。通常、十分に持っていると思う人は、もうそれ以上に欲しがらぬ。

> der rîche gewinnt nimmer ze vil, / wan die natûre hât daz guot / daz ez machet gireschen muot. / mit dem guote wehset girescheit, / erge, vorht, müe, leit.[19)]
>
> 〈富裕な人は、いくら手にいれても満足しない。というのは、財貨は貪欲な心を作るという性質をもっているからだ。財貨と共に貪欲・吝嗇・恐れ・心配・悩みが大きく育っていく。〉

そのことが分からない人は、確かに愚か者である。高利貸しも収税吏も、決してそのことを分かろうとしない。なぜならその人は、自分には持っている財貨以上の価値がないと思っているからだ。これは貪欲の助言である。泥棒が私達に損害を与える基になるものは、卑しい品性なのだ。

徳操によって生ずる優れた品性は、財貨によって心の中に入り込む卑しい品性よりも、もっと長持ちするし、もっと役に立つ。優れた品性は、いかなる泥棒も盗むことができないほど多くの知恵を持っている。それゆえ私達は、優れた品性の方を選ぶべきだ。するとあなたは多分言うであろう：「あなたの教えは私の心を痛く苦しめます。と申しますのは、財貨を全然持っていない人にとって、あなたの助言は実行するのが難し過ぎるのです。私は財貨なしには暮らせません。だから財貨を得ようと努めなければならないのです。私には職人仕事の技が全然ありませんので。出来る限りたくさんの財貨を手に入れなければならないのです。財貨がなくては、一日たりとも幸せに生きていくことができないでしょう。それゆえあなたは私に、財貨の獲得を許すべきです。」そうであるなら、貪欲な心を持たずに財貨を得ようとせよ。知恵のことをよく理解し、暮らし上手であれ。宮廷作法を身につけ、協調性を備えよ。喋ることで人を苦しめないよう、黙すべきことを喋るな。主君に従うことになったら、喜んで仕えよ。すべての人々にすすんで奉仕するがよい。手に職を持たぬ貧しい人は、そのような暮らしの知恵によって暮らすように。吝嗇に仕えるよりも、立派な主君に仕える方が名誉なことである。なぜなら心を財貨に委ねる人は、吝嗇を主君として戴き、絶えず浅ましさに仕え、その足元にひれ伏さねばならないからだ。

Jâ sol ein man niht verzagen, / daz getar ich wol gesagen, / daz in got lâze verderben. / ein man mac guot und êre erwerben, / ist er guot und tugenthaft, / wan got gît im hie die kraft / daz er wert an guoten

dingen: / jâ mag im nimmer misselingen.[20)]

〈敢えて言っておくが、神が人を破滅させようとなさることに臆してはならぬ。人は立派で徳操が高ければ、財貨と名誉を獲得できる。神がこの世で、善きことを持ちこたえる力を、その人にお与えになるからだ。それゆえ彼は、獲得をしくじることは決してない。〉

徳操ある人が名誉と財貨を獲得できるよう、神は見事にはからってくださる。徳操ある人は更に、些細なことにおいても重要なことにおいても、富裕な人と肩を並べられるという自信を得られる。金の扱い方ばかりでなく、鉛の扱い方をも十分に心得ている人は、徳操を確実に身につけている。そして徳操の昼と不徳の夜を確実に分離している。嬉しくても悲しくても、激しくつまづくことはない。というのは、彼は行く手に灯り（神による導き）を持っているからだ。肉体ないしは財産に損害を受けると、愚かにも神が顧みてくださらないのだと恨む人たちを、私は数多く見てきた。このことは彼らにとって大きな不運である。聖人達がどのような苦しみを受けたか、どのような苦悩や拷問を、どのような死や貧しさや恥辱を受けたかを、彼らはよく考えてみるがよい。もし人がいつも喜んで不幸を受け入れるなら、その不幸は実は大きな幸せであるとすぐに理解されよう。私達の主でおられる神も、貧困と嘲笑を、喉の渇き、飢餓、寒さ、その他の苦しみを、見事に耐えようとなさった。私達皆に命を授けてくださるお方は、最後に私達に代わって死への旅立ちをしようとなさった。神が人に富を与えようとなさらず、自らがなさったように貧しく暮らさせるなら、その人は神と同じであることを大いに喜べるであろう。神がご自分と同じように扱っておられる人が、もし腹を立てるようなことでもあれば、それこそ不思議というもの。この世で神とともに喜んで苦しみを受ける人は、死後はあの世で神とともに幸せに過ごせるのだ。

さあ私はすべての主君らに、灯りを決して落とさないように助言しよう。彼らが私達を、いつも太陽の光が輝いている天国の扉へ連れていってくれるまで、足元を明るく照らしてもらいたいので。彼らだって天国へ行きたいだろうから。灯りが消えたら、主君にはすぐに灯りをともしてもらいたい。そしてその灯りを高くかかげよ。そうすれば彼も私達もよく見えるが、もし彼がそうしてくれなければ彼も私達も転ぶ。灯りを高くかかげない人は、当然なことに穴に落ちる。いつも夜のあいだ馬に乗る人は、見えにくいため溝に落ちて倒れる。敵どもは闇が好きだ。泥棒は闇夜に乗じて盗みを働く。昼間には犯そうとしない悪事を、夜の間にたくさん犯す。しかし夜間に行うことを、明るい昼間がすっかり暴露する。夜の恥辱は、しばしば昼間にはっきりと見られる。

最後の審判は、人が今していることを後日すっかり述べ立てる。ゆえにその日は恥辱の日になる。なぜなら、人が負っている罪や悔い改めないままでいる罪は、その日にすっかり明かされるからだ。今ならまだ自分の罪をもっと軽く、恥辱をもっと減らして述べることもできる。悔い改めるためには、三つのことを思い浮かべるべきだ。畏れ（vorht）、希望（gedinge）、愛（minne）の三つである。心から悔い改めようとする人は、神に対して希望を、神慮のために畏れと愛をもつべきであるから。良い信仰によって、私達はいつもこれら三つのものを授かる。神の大きな苦しみと、神が私達のために死を受けられたことを信じ、私達がその方へと心を向けるならば、大きな愛を与えられる。神が地獄を破壊し、その後で復活なさったことを信じるなら、そのことは確かに私達に希望を与えてくれる。これは、神が私達に楽しい暮らしを与えてくださるという希望である。神が裁きに来られると知ったら、私たちはいつも神への大きな畏れを抱く。神の方に目を向ければ、そのやさしさと慈悲によって愛が与えられる。神が慈悲深く強大でおられることが、私達にいつも希望を与えてくれる。しかし神の正義と裁きは、私達を畏

れさせる。

uns gît sîn menscheit / minne, unde sîn gotheit / gedinge, unde sîn geriht / vorht, ob man geloubt der schrift.[21)]

〈聖書を信じるなら分かることだが、神の人間性は私達に愛を、神の神性は希望を、神の裁きは畏れを与える。〉

優れた分別を持ちたいのなら、神に対する畏れ・希望・愛のために、自分の罪を悲しみ、また苦しむべきである。

生きている間に罪の償いをしようとしない人は、神を愛しているとは到底言いがたい。神はやむにやまれぬ理由があったわけではないのに、私達のために死を受け入れようとなさったのだ。神を愛していない人の信仰など全く無意味である。なぜならそのような人は、神が私達のために多くのことをしてくださった事実を、信じることができないからだ。先述のように、愛は神を信じる心から生ずる。神の人間性とお慈悲を信じる人は、神を愛する必要などないと考えることは決してできない。神を愛しているなら、最後の審判の日を待つのではなく、今できる間に神に奉仕すべきである。神に奉仕しようとしない人は、神を愛していることにはならぬ。神を愛さない人は、神の人間性を信じていない。確かな信心を持たなければ、その人は一体どうなるのであろう。罪の償いを最後の審判の日まで放っておく人は、本来もっと早く神への愛のためにしておくべき償いを、最後になって神への畏れのためにしなければならなくなる。それでも畏れと愛のために神に奉仕する人は、確かに徳操と分別を持っており、すっかり神の子になれる。しかし死に直面するまで断固として懺悔をしようとしない人は、奴隷根性の人である。だが罪の中にかくも長い間とっぷり浸かっている人でも、せめて最後の日には懺悔をするべきである。彼がただ畏れのためにのみ懺悔をしようとも、神は心優

しいお方なので、愛のためにそうする分別を気軽に彼にお与えになる。彼が懺悔をするなら、神がまだ彼にお慈悲をかけてくださるという希望を、私は幸いなことに抱くことができる。彼がこの世でどのような罪を犯そうと、あの世に行く前にその罰を受けなければならぬ。神への畏れと愛のために、この世で懺悔をしながら罪の償いをすることは、極めて大切な分別である。なぜなら、この世で罪の償いをしなければ、あの世で私達は千倍も不幸せになるからだ。しかし、たとえ償いをせずに懺悔をしても、神の国は私達に与えられる。うっかりして懺悔の機会を逸することがありがちなので、折角元気に生きている間に懺悔をするのが望ましい。いつも死が、どれほど私達の近くに用意されているか知れないので。

どんな悪事を行なっても、神の優しさとお慈悲がすべてを赦してくださると考える人がいる。その人はすっかり思い違いをしているし、誤った信心のために身を滅ぼしている。彼が神から裁きを奪おうとする傲慢さに、神はきっと立腹なさるであろう。神は正義に反してまでお慈悲を掛けることはなさらぬ。お慈悲はいつも正義と一体であるからだ。さりとて神の裁きに、全くお慈悲がないというわけではない。神に対して畏れと希望を抱くのは、実に素晴らしいことだ。主を畏れない人は、主の裁きを信じない。神に対して希望を持たない人は、神のお慈悲を信じない。正しい懺悔をしようとする人は、自らが犯した悪事や罪を後悔しなければならぬ。それと同時に司祭にそのことを打ち明け、司祭から命じられることを実行するがよい。すると神の怒りがその人から取り去られる。犯した罪を司祭に打ち明ける際、何回にも分けて懺悔をするべきではない。なぜなら司祭は彼のことを、できるだけ早く十分に知らなければならないからだ。ところが人は無造作に言う：「私は懺悔するのが恥ずかしい。」司祭に懺悔できないほどに悪辣な行いなら、もっと酷く恥じることになる。恥じらいが贖罪に役立つなら好ましい。犯した罪が大きいか小さいかを司祭に判断してもらえるように、何をどこで、い

ついかに、そしてなんのために犯したのかを、すべて一度に打ち明けるべきだ。そうすれば、司祭は的確な助言をすることができる。そうでなければ効果をあげることはできない。

自分が昼に絞首刑にされると思えば、誰も夜に盗みを働こうとはしないであろう。立派な人に良いことが起こる場合、それとは反対に悪事を行う私達に何が起こるかを知れば、私達はなにも悪事を働かなくなるであろう。主の裁きを信じないことによって、私達は多くの不正を働いており、そのことによって自分の正義をいっそう酷いものにしている。私達の信心が、神と名誉に応じてもっと良いものであろうとするなら、それは私達にとって喜ばしいことなのだが。それでは私達はどのように生きていくべきか。あるいは私達の生はどうあるべきか。このように問うのは、病をえた私達に薬が必要であるからだ。闇に近寄りたがる私達には、灯りが必要である。それがなければ右手が左手になり、子羊が狼になる。私達はだれも秩序を正しく維持できない。宗教者はしかるべき教えを行なわないし、俗人は宗教者に全く従わない。無知もあれば愚かもある。人々は次から次へと堕落していく。堕落した者らを誰も引き上げようとしないし、各々が堕地獄へ向かおうとする。宗教者らは地獄へと急ぎ、俗人らも大急ぎで、我先にとそこへ向かおうとする。地獄の扉で大混雑が起こる。人々は護衛を連れず、休息もほどほどにそこへと旅をする。だが、扉の内に何があるのかよく知るがよい。

> War sint komen unser sinne, / daz wir niht kunnen verstên / daz ein ieglîcher muoz gên / dar dar er verdienet hât ?[22)]
>
> 〈私達の分別は一体どこへいってしまったのか。誰もが自分の所業のせいで地獄へ行かねばならぬことを理解できないとは。〉

しかし、これはどうしようもない。なぜなら、神が裁こうとなさらない限

り、神の裁きは必要ないのであるから。それでは私達の主が裁こうとなさらなければ、神の裁きはいったい何に必要なのか、私に教えてくだされ。そのような場合、神は私達が見事に裁くことを望んでおられるようだが、そうかと言って、神ご自身が裁きを放棄なさるなどと誰も思ってはならぬ。私達の主が心の邪な人を苦しめ、心の善良な人を喜ばせておられるのを信じない人は、神のお慈悲も裁きも信じない人である。そのことをあなた方はしっかりと覚えておきなさい。その人は当然ながら堕落せざるを得ず、生まれて来ない方が良かったであろう。

トマズィンは他の世俗の詩人達とは異なって、宗教者の立場から敢えて厳しい発言をする教訓詩人[23]（Didaktiker）である。『異国の客』全体にわたって、時代に対する義憤をどの詩人よりも激しく表明しているが、とりわけ「第五の書」では、道徳の堕落の責任を貴族、特に宮廷を擁する有力領主に帰している。彼らが身の回りにはべらせているのは、もはや有能かつ賢明な人たちではなく、利得をむさぼる連中や邪悪な者達ばかりである。「第六の書」でも、今や宮廷を支配しているのは財であり、豊かな者のみが権力を振り回していると、詩人は怒りをもって訴えている。そのような時代であるからこそ、トマズィンは tugent を最も重要視したのである。

注

1）Thomasin von Zerklære（トマズィン・フォン・ツェルクレーレ）に関しては、次の著書を参照。Burghart Wachinger (hrsg.): Die deutsche Literatur des Mittelalters, Verfasserlexikon, Berlin, 1995 の Thomasin von Zerklære の項。

Karl Langosch (hrsg.): Die deutsche Literatur des Mittelalters, Verfasserlexikon, Berlin 1953 の Thomasin von Zerklære の項。

2）Thomasin の代表的著作 Der Wälsche Gast『異国の客』からの引用は、次のテキストによる（以後、W. Gast と略す）。Heinrich Rückert (hrsg.): Der Wälsche Gast des Thomasins von Zirclaria, Berlin, 1965.

テキストの解釈に際しては、次の研究書からも恩恵を受けた。

Ernst Johann Friedrich Ruff: Der Wälsche Gast des Thomasins von Zerklære, Untersuchungen zu Gehalt und Bedeutung einer mittelhochdeutschen Morallehre, Erlangen, 1982.

3）「第六の書」は、W. Gast の詩行 6799–8470

4）「第五の書」は、W. Gast の詩行 5693–6798

5）特に stæte に関しては、筆者の下記の論考で詳述した。

「ドイツ中世盛期の最重要な特操 stæte」（「ドイツ文学研究」報告第 54 号、京都大学総合人間学部ドイツ語部会 2009 年 4 月、1–22 頁）

6）特に milte に関しては、筆者の下記の論考で詳述した。

「ドイツ中世におけるもっとも重要な徳操 milte」（「言語と文化の饗宴」仙葉・高岡・細谷共編、英宝社、2006 年 3 月、19–36 頁）

7）特に reht に関しては、筆者の下記の論考で詳述した。

「ドイツ中世盛期の reht（法・正義）への信仰」（「ドイツ文学研究」報告第 53 号、京都大学人間・環境学研究科ドイツ語部会、2008 年 3 月、1–24 頁）

8）『異国の客』の「第五の書」の内容に関しては、筆者の下記の論考で詳述した。

「中世ドイツの教育詩人トマズィン・フォン・ツェルクレーレの『異国の客』に映し出された悪魔像」（「ドイツ文学研究」報告 45 号、京都大学総合人間学部ドイツ語部会、2000 年 4 月、1–23 頁）

9）W. Gast 6812–6816

10）トマズィンは次の「第七の書」でも、ダヴィデやその他の賢人・知識人・聖人をとりあげる。これは詩人の学識の広さと深さを表しており、その学識は「第一の書」から「第十の書」に至るまで、全体の底流を成している。このことに関しては、筆者の下記の論考で詳述した。

「ドイツ中世のイタリア系教育詩人 Thomasin の学識」（「ドイツ文学研究」報告第 52 号、京都大学人間・環境学研究科ドイツ語部会、2007 年 3 月、1–29 頁）

11）W. Gast 6983–6986

12）W. Gast 7114–7117

13）W. Gast 7305–7308

14）W. Gast 7435–7438

15）W. Gast 7587–7590

16）W. Gast 7751–7755

17）W. Gast 7916–7918

18）W. Gast 7999–8002

19）W. Gast 8136–8140

20）W. Gast 8189–8196

21）W. Gast 8303–8306

22）W. Gast 8450–8453

23）Joachim Bumke: Höfische Kultur, Literatur und Gesellschaft im hohen Mittelalter, München, 1986, Bd. 1, S. 28